報告をすることによって，目標を立て直し，心新たに研究を取り組んでいきたいと考える。

1．本研究の目的の再確認

増大する社会保障分野の補助負担金の抑制をうたった「経済財政運営と構造改革に関する基本方針 2003」は生活保護のあり方について再検討を求めたほか，社会保障全般について制度および執行の両面から各種の改革を推進するとした。生活保護制度における老齢加算の削減・廃止は 2003 年から 3 年間の経過措置をもって実施に移され，また母子加算も 2005 年から実施に移されたほか国庫補助負担率の削減も示唆されている。こうした動きは社会保障制度審議会の「95 勧告」において既に明文化され，社会保障基礎構造改革の具体化として国民生活に襲いかかってきている。こうしたとき，国民の生存権保障を求める運動はより一層重要性を増している。

2000 年から始まった介護保険制度は開始 5 年後のこの 4 月制度改革がなされ，障害福祉の支援費制度との統合を始め対象年令や利用率の変更等が取りざたされ利用者負担増が心配されている。こうした時，長野県下伊那郡泰阜村や東京都武蔵野市の介護保険居宅サービス利用促進助成事業（利用者負担の 10%分の内，泰阜村の場合は 6%分を村が負担すると共に上乗せ事業については村の負担で実施，武蔵野市の場合は 10%分の内 7%分を市が負担）し介護を必要とする住民の生存権保障に力を注いでいる。また，滋賀県大津市の障害児の早期発見，早期対応を柱とした「1974 大津方式」はインテグレーションからインクルージョンへと世界の障害児福祉，障害児保育の目標が進みつつある時，大津の取り組みの全国的普遍化は急務といえる。

本研究は，こうした先進自治体の取り組みを学び，普遍化する道を模索することである。

2．2 年目研究の方向性

2004 年度研究を踏まえ， 泰阜村，大津市，武蔵野市住民がそれぞれの自治体施策をどう理解し，評価しているか，小平市など短大周辺自治体住民の認識度，ニーズ調査なども実施し，両者の比較検討する。

泰阜，大津，武蔵野市の取り組みについてどう評価するかを小平市をはじめ首長や保育園長に対する評価調査を実施する。同時に財政分析を通じて「誰もが住み続けられる社会をどう築くか，先進自治体の取り組みの普遍化を模索する」についての見解をまとめる。

社会とヒューマニズム
子育て支援と次世代育成における異世代交流の相互発達的意義と効果に関する研究

保育科　金　田　利　子

目的：今日少子化対策から様々な子育ち（子どもに視点をおいた用語を用いた）支援の方策が講じられているが，対症療法の域にあるように思われる。地域全体を，子どもが育ちやすく育てやすい発達環境にしていくことが求められている。その際，本研究では，地域に生活する全ての世代が，

相互に発達的に響き合えるとき，子どもにも育ちの見通しが立ち，居場所が出来ると仮説する。

そして，異世代異発達の人たちの発達的相互作用の研究へと発展させたい。

方法：①先行研究・先行実践に当たり，文献・資料・先行実践の観察等から上記の仮説を実証する。②その上で，大学内に学生の子育立ち支援の実習的意義も含めた「子育て広場事業」の立ち上げ計画の中に「世代間交流広場」を設け，そこでの世代間相互の育ち合いの過程を分析し考察する。③それぞれの世代にどう人間発達的に意義があったかのアセスメントを行う。④大学の立地場所である自治体（小平市）の取り組みと大学の取り組みの交差交流の方向を地域関係者と協議していく。

結果と成果：今回は①，②，③についてまで行った。③については，十分科学的な方法でアセスメント出来たとは言えないが，感想文，アンケート，聞き取りなどで一定の成果を見た。④は個人的にではなく，大学として行うものであるが，世代間交流を継続している小平6小およびその前校長の進めているコミュニティースクールづくりと関わることで下地を作ってきている。

ここでは②を中心に述べる。広場の開催はまだ緒についたところだが，参加者は学生と高齢者クラブの方，教職員，地域の親子で，伝統的な遊びやシニアの子育ての知恵コーナーなど諸場面を用意し交流するものである。開催までの準備の過程も交流であり，取り組むことで，どの世代もそれぞれに役立つことを喜びとしていること，しかし，精神的なものと体の関係の学びが必要性など，相互の生きた人間学習の場になった。世代間交流をとりいれた「世代間交流広場」に参加した親へのアンケートによれば，若い母親たちも「シニアと一緒に遊んだことが楽しかった」というものが多く，60％に及んでいた。さらに，何処がどう楽しかったのかなど探究していくことが世代間交流の相互発達的意味を見いだす上で大切になる。また，現在は，場を用意し自然な交流を楽しむ方法をとっているが，さらにプログラムを変更したらどうなるかも課題になる。一方，子どもや若い親と関わったシニアの方も参加自体を楽しんでいるようであるが，続ける中でさらに人間発達的意味を究めていくことが求められる。

スタッフとして参加した学生も異世代と関わり，学生の行動観察や自身の言葉からその変容の著しさがわかる。高齢者観の変化もその一つである。総じて所期の目的のように「世代間（当初「異世代」と表現していたが，社会学関係の世界ですでに世代間交流という概念が定着してきているので変更した）広場」を作りそこから一定の相互発達の状況が見られた。今後さらにきめ細かく探究していきたい。

信州大学ブナ原生林教育園の植生とアリ群集（追加研究）

保育科　近　藤　正　樹

昨年までに1.3haの林内を4m間隔にハチミツ稀釈液トラップを用いて誘引調査をしてきた。この範囲は林分の25％程度で，基本的な理解をするためには不充分と考え本年は追加調査を続けることにした。あいにく協力者が得られなかったので，単独入山し，結局7回（山作業は35日分）に及び，林分の10％（0.5ha）のデータの追加ができた。